

鈴木原子力委員会委員長代理の海外出張報告

平成 25 年 1 月 21 日

1. 目的

2014 年 1 月 12 日—15 日の 4 日間にわたり、米科学と芸術アカデミー (American Academy of Arts & Science : AAAS) 主催による「ASEAN 地域に導入される原子力 : 安全・セキュリティの向上に向けての道」と題する国際ワークショップに参加し、各国の専門家と意見交換を行う。

2. 日程

1 月 12 日 (日)	羽田発 バリ島着、AAAS 主催レセプション
13 日 (月)	AAAS 主催国際ワークショップ参加
14 日 (火)	同上
15 日 (水)	同上 バリ島発
16 日 (木)	成田着

3. 報告 (概要)

- AAAS は 1780 年に設立された民間の学術・芸術専門家組織で、重要な社会・政策課題について、自ら研究活動を実施している歴史ある団体である。AAAS では活動の一つとして「世界の安全保障とエネルギー」を実施しており、5 年ほど前から「世界の原子力の将来(Global Nuclear Future)」というプロジェクトをハーバード大学 Steve Miller 教授、スタンフォード大学 Scott Sagan 教授の共同主査により実施してきた。昨年 9 月には広島で日米専門家を集めて「福島の教訓」と題するワークショップを実施している。なお、会議はチャタムハウス・ルール (情報は共有してよいが、個人を特定しての引用はしてはならない) で行われた。
- 今回は、今後原子力発電を導入しようとしている ASEAN 諸国の専門家を中心とした国際ワークショップであり、参加者は約 30 名で、日本からの参加者は一人だけであった。地元の共催団体はパラマディナ大学と Centrist Asia Pacific Democrats International (CAPDI) と呼ばれる民間の専門家・政治家・市民団体活動家等をつなぐ国際ネットワーク機関であり、CAPDI は日本からも国会議員や運動家が参加している。パキスタン、インド、中国などにもネットワークが広がっており、今回の参加者の多くも地元の CAPDI メンバーであった。
- 基調講演も CAPDI の会長で前インドネシア副大統領の Jusuf Kalla 氏が行った。基本的にはインドネシアの原子力への関心の高さを示した講演だったが、この AAAS のプロジェクトへの期待 (技術面だけではなく安全保障や社会受容面も議論) も強調した。

- 第1セッションは、「東南アジアにおける原子力発電の拡大について」と題するセッションで、原子力発電の拡大が核拡散リスクの増大につながらないようにするために何をすべきかについての議論を行った。ここでは、原子力技術へのアクセスは権利として否定されるべきでないという途上国側の意見と、核不拡散のためには今以上の制約を考えなければ原子力の発展もない、という先進国側の意見の対立をどう解決していくか、というNPT体制の根本的課題が議論された。原子力発電の経済性についても議論があった。
- 第2セッションでは、ベトナムに焦点をあて、プロジェクト側からベトナムの核保有可能性について仮想シナリオが紹介された。参加者からは、信頼を重視することが重要であり、核保有の可能性についてあまりベトナムを刺激するのはよくない、という意見も出された。一方で、地域全体の安全保障を考える上でも、他の新規導入国にとっても、仮想シナリオを議論することは意味がある、との意見もあった。
- 第3セッションは、ASEAN地域における法・規制的な枠組みについての議論で、プロジェクト側からは主に損害賠償の枠組みについて国際調和が重要であるとの発表があった。その他に輸出管理規制についても、国際条約や国内規制の整備が遅れている国がある点について議論があった。
- 第4セッションは、使用済燃料の国際貯蔵についての新たな提案がプロジェクト側からなされ、出張者も含めて専門家がコメントを行った。国際貯蔵への反対意見はなく検討に値するとの意見が大半を占めた。ただ現実には、「NIMBY問題をどう解決するか」、「むしろ国際処分の方がメリットが大きいのではないか」、「研究開発の国際化の方が重要ではないか」、等の意見が出された。ASEAN地域で今からこのようなバックエンドの協力について議論することの重要性が指摘された。
- 第5セッション、第6セッションは、市民社会との関係を扱い、ベトナム、香港、インドネシアから発表があり、その後の意見交換も活発に行われた。インドネシアのNGOと政府・規制当局の間でも率直な意見交換があり、チャタムハウス・ルールで行う会議ならではの意義あるセッションであった。
- 第7セッションは、原子力平和利用と核不拡散についてASEAN地域の関わり方についての意見交換であった。プロジェクトの目的として、(原子力や核問題についての)「偏らない、独立した情報・知識プールとそのネットワーク作り」への支援が提案された。「アジア太平洋原子力コミュニティ」の提案もあった。外交政策でよく使われるトラック2が「独立性担保と政策関係者の関与」のジレンマに陥りやすいとの指摘もあった。
- 第8セッションは、核軍縮、核不拡散への地域の貢献をテーマに議論があった。核不拡散条約(NPT)における核保有国、非核保有国それぞれの責任と役割について議論があった。第4条の「(平和利用の) 侵し得ない権利」と第6条の「核軍縮への努力」は、核保有国・非核保有国が共に責任を負うべきとの意見が注目を浴びた。特に核燃料サイクル(濃縮・再処理)の取扱いについて議論があった。

(所感)

- 原子力を導入しようとする ASEAN において、原子力と核不拡散の議論を行うことについては、いろいろと議論があったことと思われるが、地元の共催者である、CAPDI とパラマディナ大学の関係者の努力には敬意を表したい。政府、国会、地元 NGO 等、多くの関係者が率直な意見交換を行ったことは大変有益だったと思われる。
- 原子力発電について、基本的な情報（経済性、安全性、核拡散との関係、廃棄物処分問題等）が、原子力専門家以外の研究者、政策関係者、市民団体に共有されていないことが大きな課題である。AAAS プロジェクトチームが試みようとしている、「独立で不偏の情報プール」の確立は、我が国でさえ十分であるとは言えず、その必要性を改めて痛感した。